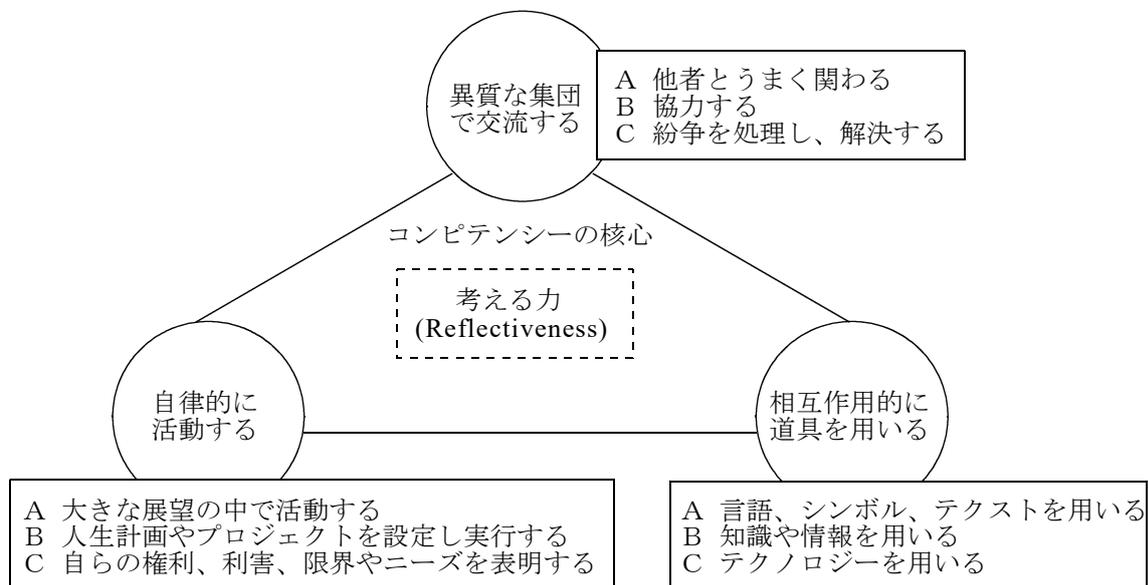


立田慶裕著「生涯学習の新たな動向と課題」放送大学教育振興会 2018年3月20日刊を読む

21世紀を生きる力—キーコンピテンシーズとは—



3つのキー・コンピテンシー

(立田、2014、p. 32より改正)

<はじめに>

- (1) キー・コンピテンシーは、①「人生の成功」と「正常に機能する社会」を目標とすること、②「幅広い文脈で、重要・複雑な要求や課題に応えること」、そして、③「すべての個人にとって重要」だという点から、次のように定義されている。
- (2) 「特定の問題状況に対応するため、知識や技能、態度を含む多様な資源を活用し、動員して、複雑な需要やニーズに応える力」
- (3) キー・コンピテンシーの核心には、「思慮深く『考える力』(反省性、reflectiveness)」がある。
 - ① 思慮深く考える力とは、「考える主体が相手の立場に立つ」ことだけでなく「メタ認知的な技能(考えることを考える)や批判的なスタンスや創造的な能力活用」が重要であるし、「ある程度の社会的成熟」も求められる。
 - ② 「思慮深く考える」には「社会的な抑圧から一定の距離を置き、異なる視点を持つこと」が必要であり、「自主的な判断」と「自分の責任を持つ機会が与えられるに従い、この力は育っていく」。
 - ③ この思慮深さ(考える力)を育てるために、次の3つのコンピテンシーのカテゴリーが相互に関わっていく。

I カテゴリー1) 道具を相互作用的に用いる力

1. (1) このコンピテンシーが必要な理由は、知識や技術の急激な進歩が続き、グローバル化が進むこの時代や社会では、最新の技術を学習し続ける、自分の目的に道具を合わせる、世界と

活発な対話をするのが重要だからである。

(2) 具体的な能力として、この力では、道具は「人が積極的な対話を行う装置」と捉えられ、コンピュータのような物理的なものだけでなく、知識や情報、技術といったものも文化的な道具と考えられる。その時、人が世界や他者と対話し、相互作用する方法をこれらの道具がどのように変化させるか、

(3) また目標を達成するためにどのように活用できるかの理解も重要となる。つまり、道具は、単なる受動的な装置ではなく、周りの環境と積極的な対話を行う装置なのである。「リテラシー」の概念がこのキー・コンピテンシーと関係する。さらに、具体的な能力として次の3つがあげられる。

2. 【言語、シンボル、テキストを相互作用的に用いる力】

(1) 「様々な状況で、読み話し書く」といった言語スキルや、「記号や図表の活用を含む数学的なスキル」がここに含まれる。

(2) このスキルはまた、「社会や職場でよりよく働き、他の人々との効果的な対話に参加するための必須の道具」であるともいえる。

(3) PISA の読解力 (reading literacy) と数学的リテラシー (mathematical literacy)、や計算リテラシー (numeracy) は、このキー・コンピテンシーを測定可能なものとしたものである。

3. 【知識や情報を相互作用的に用いる力】

(1) サービス産業や情報産業分野の拡大、そして知識基盤社会の中で知識と情報を相互作用的なネットワークの中で活用することが必須の力となりつつある。

(2) このキー・コンピテンシーに必要なのは、「知識や情報の性質、その技術的基盤や社会的、文化的、思想的な背景や影響について考える力」である。

(3) 情報を収集し、整理する能力は、「選択肢の理解、意見の形成、意思決定において責任を持って行う多様な活動の基礎」である。

(4) 具体的なコンピテンシーとして科学的リテラシーがある。

(5) 生徒たちは、科学的な探究活動にどれだけ進んで参加し交流しているか、科学的な疑問にどれだけ関心を持っているか、そして科学的に考えることができるかが問われる。

(6) その他の例としても、「わかっていないことを知り、何をすべきか決定する」、「適切な情報源を探し、発見する」、「情報源に加えてその情報の質、適切さ、価値を評価する」、「知識と情報を整理する」、などの力がある。

4. 【テクノロジーを相互作用的に用いる力】

(1) 技術革新は職場の内外で個人に新しい技術の学習を求めるだけでなく、テクノロジーの進歩自体が新しい学習法や学習機会を人々に提供している。

(2) 対話などの相互作用への技術の活用は新しい手法への注意を促し、その手法を日々の生活に活用できることも示す。

(3) 「膨大な情報量をたやすく利用でき、場所にかかわらず働き、世界中の人々と対話する可能

性」をもたらす。

(4)しかし、基礎的なスキルの学習だけでなく、テクノロジーの潜在的な可能性を考えれば、私たちは自分たちの問題や目標に関連づけ、共通の実践や問題解決に技術を役立てることができる。

II カテゴリー2) 異質な集団で交流する力

1. (1)このコンピテンシーが必要な理由は、私たちが価値や文化の多元化の進む社会に生きており、そこで豊かで円滑な生活を送るためにも、他者への思いやりと理解を深める力や、人間関係の形成と運営を良好に行える力が重要となってきたからである。

(2)①人生を通じ、人は他者との絆に依存する。

②そこで、この力が具体的に個人に求めるのは、他者と共に学び、働き、円滑に交流することである。家族や地域といった既存の社会的な絆が弱められ、断片化と多様化の進む時代に、新しい人間関係をつくったり、その良好なマネジメントを図る力は、個人にとっても新しい社会をつくる上でもいっそう重要である。

③社会的能力、ソーシャルスキル、異文化間能力、柔軟な能力などの用語と関係する多くの特徴をこのコンピテンシーは持つ。

④その具体的能力として次のものがある。

2. 【他者と良好な関係をつくる力】

(1)①このコンピテンシーは「人間関係をつくる」だけでなく、「その維持や管理も行う力」である。

②「家庭や職場、地域での良好な関係づくり」はその絆の強化を含めて、社会的・経済的成功の条件でもあり、情動的な知性をも企業は重視している。

③自分に快適な環境をつくるには他者の価値観や信念、存在を尊敬し評価するだけでなく、他者から学んで成長することも重要な力である。

④他者と良好な関係をつくる力には、例えば次のようなものがある。

(2)①「共感性」他者の立場に立ち、その観点から状況を想像する。これは内省を促し、広い範囲の意見や信念を考える時、自分にとって当然だと思ふような状況が他者に必ずしも共有されるわけではないことに気づく。

②「感情の効果的なマネジメント」自分のことに気づき、自分の基本的な情動と意欲の状態と他の人の状態を効果的に読み取る。

3. 【協力する力】

(1)①個人単独で対処できないような要求と目標に対し、チームや市民運動、経営組織や政党、労働組合などのグループで力を合わせ、同じ利害を共有する人々の力が必要となる。

②そうした協力に必要なのは、メンバーが一定の資質を持って、集団の目標や関わりと仕事の優先順序を調整し、役割分担しながら他者と助け合う力である。

(2)実際には、

- ①「自分のアイデアを出し、他人の話を聴く力」、
 - ②「討議の力関係を理解し、基本方針に従う力」、
 - ③「持続可能な協力関係をつくる力」、
 - ④「交渉する力」、
 - ⑤「反対意見を考え決定できる包容力」
- などがある。

4. 【争いを処理し、解決する力】

- (1) 家庭や学校、職場を含め、人間関係に常につきまとう現実として、争いは生活のあらゆる面に見られる。各人やグループが多様な要求、利害、目標、価値観を持つ以上、その調整をしないと対立や争いが生じる。
- (2) この争いの存在を否定するよりも建設的方法で取り組む鍵は、争いを目標実現のための1つのプロセスと考えることである。対立する両者の利害や要求を考慮して両方の利益が得られる解決策を工夫する力が重要となる。
- (3) そのためには、
 - ①「できるだけ異なる立場があることを知り、現状の課題と危機にさらされている利害(例えば、権力、メリットの認識、仕事の配分、公正)について、すべての面から争いの原因と理由を分析する力」、「合意できる領域とできない領域を確認する力」、
 - ②「問題を再構成する力」、
 - ③「進んで妥協できる部分とその条件を決めながら、要求と目標の優先順位をつける力」などがある。

III カテゴリー3) 自律的に活動する力

1. このコンピテンシーが必要な理由は、複雑な社会で自分のアイデンティティをを実現し目標を設定する、権利を行使して責任を取る、自分の環境を理解してその働きを知ることがあげられる。

具体的な能力が自律的に活動することであり、明らかな自己概念を伴い、意思を持った行為を行えること、つまり決定や選択、そして自らの欲求や要求を実際の活動に置き換える能力である。具体的能力として次のものがある。

2. 【大きな展望の中で活動する力】

- (1) 人は自分がどこにおり、どんな人物として生きているか、自分の行為や決定がどんな影響を持つかを社会や時代の大きなイメージの中で知り、選択と活動を行う必要がある。
- (2) 実際には、
 - ①「歴史や社会の認識とビジョンを持つことができる」、
 - ②「社会の理想像を自分と結びつける力」、
 - ③「社会の構造や文化、実践、自分が果たすべき役割や期待を理解し、法律や規則、また文書化されていない社会的規範や道徳作法、マナーや慣習を理解できる」、
- (3) あるいは、

- ①「義務に関する知識が他方で権利についての理解ともつながることがわかる」、
 - ②「自分の行為の直接的・間接的な結果を知る力」、
 - ③「個人及び共通の規範や目標に照らして行為が導く結果を考え、違う道に至らう行為の選択も行うことができる」
- などである。

3. 【人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する力】

- (1)このコンピテンシーでは、自分の希望や夢と可能性、そして実現可能な領域での堅実な将来展望が求められる。
 - (2)自分の人生を一つの「物語」と見なし、変化する社会や環境の中に意味と目的を与える力である。
 - (3)具体的には、
 - ①「計画を決め、目標を定めることができる」、
 - ②「知識や技術、時間、お金、人間関係など自分が利用できる資源と必要な資源を知り、現状を評価できる」、
 - ③「目標の優先順位を決め、整理できる」、
 - ④「多様な目標に照らし必要な資源を用意できる」、
 - ⑤「過去の行いから学び、将来の成果を計画できる」、
 - ⑥「進歩をチェックし、計画の進展に応じて調整できる」
- などである。

4. 【自らの権利、利害、限界やニーズを表明する力】

- (1)多くの権利や要求は、法律や契約により制度的に擁護されているがそうでない状況もある。
 - (2)そうした問題に対して、自分自身の権利や要求、利益を知り、積極的に主張して守る時、最終的には個人の力が重要となる。
 - (3)他方で、集団の一員としても自分が生活する地域や働く職場で、民主的な団体や地方と国の政治活動への積極的な参加などが求められる。
 - (4)具体的には、
 - ①「過去の行いから学び、将来の成果を計画できる」、
 - ②「進歩をチェックし、計画の進展に応じて必要な調整を行う力」、
 - ③「選挙などから自分の利害関心を理解できる」、
 - ④「個々のケースの基礎となる文書化された規則や原則を知る力」、
 - ⑤「承認された権利や要求を自分のものとするための根拠を持っている」、
 - ⑥「問題の処理法や代替的な解決策を指示できる」
- などである。

5. (1)以上のキー・コンピテンシーは生涯にわたり成長し変化する。

(2)加齢に従い、その獲得と喪失の可能性がある。

(3)各コンピテンシーの発達は青年期から成人期を通じて継続し、状況に応じて変化するが、核心部にある思慮深さだけは成熟に伴い成長すると考えられている。

IV キー・コンピテンシーの意義

1. 個人の健康

- (1)人生にとって健康は本当に重要である。
- (2)この健康のリテラシーが読解力と関連が高いことは、成人のライフスキルとリテラシー調査の中で次第に明らかになってきている。

2. 人間関係とコミュニケーション能力

- (1)相互作用を形成し、異質な集団で生きるために重要なコンピテンシーを構成する要素、コミュニケーション能力は、教育の研究の中でも非常に重要な能力である。
- (2)職場や家庭、地域で生きる上でも、人間関係をつくっていく上でも、個人が社会とつながるための鍵となる力である。

3. 人生の設計

- (1)人生設計は、多くの国で性別の役割分業が進んできたこともあり、大きな性差が見られる。この能力をめぐる問題は同時に、各国の職業構造や社会構造における性差を反映した問題ともいえる。
- (2)他方、近年の寿命の延長は、各国の社会制度に大きな変化を迫っている。
- (3)将来への展望を持つことが難しい時代だからこそ、自律的に計画し、状況に応じて対応する力が求められている。

4. 個人のコンピテンシーの発達

- (1)キー・コンピテンシーは、生涯にわたって成長し、衰え、状況に応じて変化することが前提とされている。
- (2)「コンピテンス・レベルの発達は、子供時代から成人期への過程を通して、どう個人の『知る方法』が変化するかを述べる発達心理学からの理論的観点に基づくことを提案している。
- (3)コンピテンスのレベルの向上は精神的複雑さの緩やかな発達と関連している。
- (4)およそ青春期の間に、人々は抽象的に考え、価値や理想を自己反省を通して構築し、自分自身の興味を他の人やグループのものに従属させる能力を発達させる。より高次の精神的複雑さは、成人が『社会生活に適応する圧力』から距離をおいて考えることができるときに到達するものであり、また自身の判断を作るものでもある」

5. コンピテンシーの相乗性

- (1)PISA や一連の国際成人リテラシー調査で明らかになった重要な発見は、1つのリテラシー能力の発達と深い関係にあることだろう。
- (2)例えば、読書能力や読書の習慣の有無は、学力や健康、科学的なリテラシーなどの向上とも

関連している。

- (3) 一度習得したリテラシーや習慣が学校段階や個人の発達につれて衰えたり、消滅したりすることがあるとすれば、学習の適時性の問題や効果的な習得、完全習得の研究が重要となるだろう。
- (4) 同じことは、コンピテンシーのレベルでもいえ、3つのコンピテンシーには相乗的関係があり、1つのコンピテンシーの向上は他のコンピテンシーの向上にもつながっていく。

6. 社会の機能維持と発展

- (1) 生涯学習の視点に立てば、学習の基礎が学校段階において形成される必要があるとしても、そこで行われた学力評価により人生がすべて決定される仮説やシステムには問題がある。
- (2) もし、富める学力を持つ者がますます幸福となり、貧しい学力を持つ者が不幸になるようなマタイ効果が発生しているとしたら、格差は広がるばかりである。
- (3) 挫折や失敗を乗り越えられる機会が提供できるような学習システムが求められよう。

7. 21世紀型コンピテンシーの展開

- (1) 伝統的な学問のカリキュラムの発展は、知識を創造し、21世紀の理解を生むために急いで進められるべきである。
- (2) 人間行動を形成するスキル、態度、価値観は、学校や家庭で時にみられる差別的な行動に立ち向かうためにも見直されるべきである。
- (3) 現代の学習の本質的な要素は、「最高の学び方を考える力」にある。
- (4) 各学習者は、「自律的に行動するコンピテンス」のように、「最小限のキー・コンピテンシーを達成するよう努力すべき」である。コンピテンスとは、「学習プロセスの反省的アプローチを伴いながら、世界に参加し世界で行動するために、知識やスキル、態度や価値観を状況に応じて活用する力」である。グローバル・コンピテンシーもまた、このモデルつに基づき正しく構築されていく。
- (5) 「学び方を考える力」や自律的コンピテンシー、そして、他者との関係性を重視しているという点では、デセコで探究されたキー・コンピテンシーの意義を生かしながら新たな方向性へ進む姿勢がここには見られる。知識やスキルだけでなく、態度や価値という人間の根源的な行動パターンがここには示されている。

P.34 ~ P.43

V 学習の認知的視点：重要な10の知見

OECDの2010年の報告書『学習の本質』では、これまでの学習に関する認知的研究を整理し、優れた学習環境を生むための理論から学習の認知的視点と実践的な活用へのヒントがまとめられている。

1. 知見1) 学習は、本質的に学習者によってなされる活動である

- (1) 学習者は、自ら知識の構造をつくらなければならないとされる。教師は一般的に、生徒よりも多くの事を知っている。

- (2)そこで、生徒が何を学ぶかを決定するのは教師であり、教師の行為が教授の質に影響を与えるという印象を与える。
- (3)その際に、教師は、教授方法についての正しい教育学的知識と、教える項目についての正しい知識内容が必要とされる。
- (4)教育学的な知識内容とは、どのように生徒がある教科領域で知識を構成するかの認識である。

2. **知見2) 最適な学習は、既存の知識を考慮に入れる**

- (1)生徒は、新しい情報を既存の知識に照らして解釈し理解する。
- (2)この生徒の既存の知識(教科における獲得知)が、新しい学習に影響する。
- (3)既存の知識の重要性は、特定の教科に限定されない。
- (4)日常生活の出来事、趣味、メディア、友人、親、学校の授業など、様々なフォーマル、インフォーマルな文脈から生まれる。
- (5)異なる親を持ち、異なるメディアを使い、異なる興味を持つ。
- (6)そこで教員は、クラスの能力レベルだけでなく、生徒個々人の既存の知識に即して教えることが求められる。
- (7)継続的に生徒の知識を評価・診断する情報が必要となる。そのために有効な方法が形成的アセスメントである。

3. **知見3) 学習には、知識構造の統合が必要**

- (1)上述したように生徒の既存の知識が広い源から出ているという事実は、異なる状況で獲得した知識の断片間の抽象的な関係を認識できない。
- (2)既存の知識との関係を理解していないとき、誤った理解に陥る。
- (3)人は、誤った概念と正しい概念を同時に持つからである。経験的研究では、子どもはしばしば、これに気づかない。
- (4)学習者の異なる生活領域に属する知識は、学習者の思考においても異なる領域に属する。
- (5)そこで、知識の統合が必要とされる。
- (6)生徒が徐々に、多くの知識の断片を結びつけ、専門家の観点を採用するように支援することが、教授の主な目的である。図表を用いたり、問題の関連性を発見する学習が有効となる。

4. **知見4) 最適な学習による「概念、スキル、メタ認知能力」のバランス良き獲得が重要**

- (1)知識の統合で重要な点は、「概念」と「手続き」の知の間を関連づけるような支援である。
- (2)「概念」とは、ある領域の原則に関する抽象的で一般的な言明である。
- (3)「手続き」はどのように問題を解くのかを具体的に示すルールである。
- (4)「手続き」の知識はレシピのようなもので、目標に到達するために実行されなければならない具体的な手順を意味する。
- (5)「概念」と「手続き」は双方とも能力の重要な部分である。

5. **知見5) 学習は、基礎的知識の断片の組織化により複雑な知識構造を最適に構築できる**

- (1)人間の知識には、階層的な構造化という特性が共通する。
- (2)知覚、言語、処理、抽象的概念、問題解決の手順にその特性はあてはまる。
- (3)人は、基礎的な文字と高次の言葉を伴う階層的な記憶表象を使う。
- (4)文字の知識は、言葉の認知を助け、言葉の知識は、文字の認知を助ける。
- (5)分類上の知識やより複雑な概念にも応用できる。
- (6)知識の階層的組織は、手続き的知識にとっても重要である。

6. **知見6) 最適な学習のための知識構造の組織化に外部世界の諸構造を活用する**

- (1)豊かで優れた、そして組織化された知識構造の獲得のためには、構造化された、最適な学習環境を提供することが重要となる。
- (2)社会的・物理的環境内の構造化された情報が、学習者の心に知識を構造化していくからである。
- (3)学習環境における知識構造の提供には、教師と学習者が学習の目標と理由を認識していることが重要である。
- (4)学習環境には、多様な水準で、多様な構造を提供する方法がある。
- (5)その方法とは、カリキュラムの時間的な組織化、単元で導入される考え方や課題の順序、生徒集団のインフォーマルな社会構造、ワークシートのデザイン、専門用語、公式、図表、教師の特別な言葉の使用などである。

7. **知見7) 学習は、人間の情報処理能力の限界により制約される**

- (1)人の認知構造は、最適に構造化された学習材のデザインに関連した基本的特性を持つ。
- (2)その特性は、情報が能動的に処理される作業記憶と、情報が蓄えられる長期記憶を含む。
- (3)作業記憶は限定された能力しか持たず、更新されないと急速に消える。
- (4)一方、長期記憶は、ほとんど無制限能力を持ち、数日間さらに数年間も情報を保持できる。
- (5)情報は、作業記憶を通して長期記憶に入る。

8. **知見8) 学習は、情動、動機、認知のダイナミックな相互作用から生まれる**

- (1)動機づけや情動が、思考と学習を決定づける上で重要である。
- (2)動機は徐々にまたは劇的に変わる。
- (3)動機は認知的な学習過程を駆動する原因であり、認定的過程の結果でもある。
- (4)そして、認知と動機の2つの概念は複雑な相互作用を行う。
- (5)したがって、単に、動機があればよいということではなく、知識の獲得と動機が相互に強めあい、弱めあう多面的でダイナミックに相互作用するシステムとして見ておく必要がある。

9. **知見9) 最適な学習は、転用可能な知識構造を構築する**

- (1)生徒が知識構造を構築しても、人生で役立つ能力を獲得したとはいえない。学校以外の生活に関連したより多くの概念や手続きがある。
- (2)この問題解決には2つの潜在的アプローチがある。
- (3)それは、①領域汎用的な能力、②知識転移の促進である。

- (4)前者は、例えば、知能、作業記憶の容量、脳の効率的活用の訓練から高められる。
- (5)領域に関わりなく、幅広い問題解決に役立つ力である。
- (6)後者の知識転移の促進とは、新たな状況、問題のタイプに応じて、教科間の転移を助け、具体的な内容の知識を教える方法である。
- (7)知識転移の重要条件は、2つの問題状況の表面的な差異よりも、その間に共通する深い構造を理解することにある。
- (8)生徒の興味や関心を高めるために、教師は、意味のある現実世界の問題を利用すべきだろう。

10. **知見10) 学習は、時間と努力を必要とする**

- (1)複雑な知識構造の構築は、生徒にとっても教師にとっても、長い時間と努力が必要となる。
- (2)学習の面白さはある程度の努力を伴って、山に登る楽しさのようなものであり、努力もせずに頂上に座って景色を楽しむ面白さではない。

<まとめ>

11. (1)こうした認知的研究の視点から導き出された優れた学習環境の条件とは、学習者を心理的に積極的に刺激し、既存の知識に働きかけ、バラバラな知識の断片を階層的な知識構造へと統合し、概念、スキル、メタ認知能力のバランスをとり、学習者がうまく組織化された知識構造を開発するのを手助けする適切な構造を環境の中で提供し、情報や知識を処理する限界を前提にしながら、効率的な知識の処理に適切な情報を提供するものである。
- (2)また、優れた学習環境は、学習状況と毎日の生活の間だけでなく、内容領域間の知識の転移を促進する。
- (3)そして、優れた学習環境は、学習に伴う努力を要する。
- (4)学習の内容が学習者にとって意味あるものとなるようにし、学習目標を明確にし、学習環境の外部にある生活との関連性を強調し、学習者の関心・目標・自己認識に敏感に対応することによって、動機づけを最大化できる環境が、優れた学習環境といえる。

12. 知識を生かした学習環境の構築

- (1) 学習は、
- ①本質的に学習者が行う
 - ②既存の知識を重要視
 - ③知識構造の統合が必要
 - ④概念、スキル、メタ認知能力の獲得のバランス
 - ⑤基礎的知識の組織化による複雑な知識構造の構築
 - ⑥知識構造組織化のため外部世界の構造を活用
 - ⑦人間の情報処理能力の限界による制約
 - ⑧情動、動機、認知のダイナミックな相互作用から生成
 - ⑨転移可能な知識個増の構築
 - ⑩時間と努力の必要

- (2)
- (1) ナレッジ・マネジメントの認識を育てる
 - (2) 実践家の役割を広げる(教師と生徒)
 - (3) ネットワークの活用
 - (4) ICT の活用
 - (5) 教育研究の研究者と実践家の新たな関係
 - (6) 実践家のための開発の新しい考案
 - (7) 知識資本とソーシャル・キャピタルの統合
 - (8) ナレッジ・マネジメントの下部構造の強化

VI イノベーティブな学習環境の6つの要素

1. 学習環境を構築するための6つの要素

(1) 共同学習 (Co-operative learning)

- ① 本質的に、生徒たちは、共に活動し、自身の学習と同じように他者の学習に責任を持つ。考えることを重視し、高次の学習の増加につれて、能力別クラス編成に代わるものとして、生徒たちに少しずつ共同活動の力を準備する方法として、共同学習は一定の教育的利益を持ちつつある。
- ② 共同学習がもたらす知の分散化と集中の効果から、効果的学習は、単独の学習だけでなく、分散型の活動にある。

(2) 調べ学習 (inquiry-based approaches to learning)

- ① 生徒は高次の認知的スリルを発達させる機会を求めている。
- ② そうするための重要な一つの状況が調べ学習によって提供される。
- ③ 調べ学習は、継続的な参加、共同、調査、資源の管理、意欲的な行動や成果の発展を求める複雑で意義あるプロジェクトにより行われる。
- ④ 調べ学習は、コミュニケーション能力、協調性、創造力、思考力を育成する重要な方法である。関連した方法にはプロジェクト型学習、問題中心学習、計画デザイン学習がある。
- ⑤ (ア) 教室で集められた知識を現実的な問題(人々の生活や仕事の中で、学校外で関わる課題)に応用できれば、生徒は深く学べる。
(イ) 成功は、学習課題の設定と学習内容の評価を行うために緻密に計画された評価方法の適用の仕方次第である。
(ウ) 調べ学習の成功は、実際に行う調べ学習に関する知識とスキルに依存する。
- ⑥ 生徒の自己概念、社会的相互作用、課題にかかる時間や仲間への肯定的感情の改善に大きな効果を発揮する。この点については、次章でまた具体的な事例を述べることにしたい。

(3) 形成的アセスメント (formative assessment)

形成的アセスメントは、学習者や教師、学習それ自体の情報を継続的にもたらす日常的なフィードバックの提供によって学習者を優れた成果に導く。そこには3つの重要な質問が向けられる。

- ① 学習者は今学習のどの段階にいるか

②学習者はどこへ向かっているか

③学習から得るために必要なものは何か

形成的アセスメントは、学習の終わりに行うテストのような総括的アセスメントとの組み合わせにより、その効果をいっそう発揮する。

(4) サービス・ラーニング (service-learning)

①教育は、重要な学業教科の学習目標と一体になったコミュニティサービスに生徒を取り組ませる。

②この経験的アプローチは、生徒たちが暮らすコミュニティの真正の、現実的な世界に基づく状況に応じた学習経験を生徒に提供する事を前提にしている。

(5) 学校と家庭のパートナーシップ

①家庭は私たちにとって、最初に大きな影響を及ぼす学習環境なので、家庭と学校の間構築された環境は、学習者の成功にとって極めて重要である。家族へ参加を促す個人的な招待へと広げることも含めて、子どもたちの学校教育への家族の積極的な参加もそこには含まれる。

②放課後プログラムや課外活動もまた家族とつながる方法を提供し、家庭と学校のさらに大きな関係を提供する。

(6) テクノロジーを活用した学習 (Learning with technology)

① ICT のようなテクノロジーを活用した学習への学習者中心のアプローチは、学習者の力になることができるし、これまではできなかった優れた学習経験をもたらす。

②テクノロジーは時にまた、効果的な学習環境内で他の機関との連携において重要な道具を提供する。個別化や共同学習、形成的アセスメントの運営や多くの調べ学習法に学習のためのテクノロジーは役立つ。

2. 生涯学習の2つの概念

(1) 学習に関する理論的な研究の整理の中で、生涯学習の観点から『学習の本質』において注目されている概念が2つある。

(2) ①その1つは、「適応的熟達化」(adaptive expertise)である。

②適応的熟達化とは、「多様な状況で学んだ知識やスキルを柔軟に創造的に意義深く活用する能力である。一つの教科や学問を固定的に型通りに学ぶような熟達化の習得を越える力である。

③むしろ、核となるコンピテンシーを変化させ、自分の熟達化の幅と深みを継続的に発展させる意思や能力を含む」

(3) ①この力の発達を助ける教育的アプローチとして、指導型学習(教師が、フィードバックや意見、褒美を提供しながら、学習目標、学習戦略、成果の評価法について関連する主な決定を行う)、

②アクション・ラーニング(学習目的を決めるにあたり、指導型学習よりも学習者がいっそう多くの能動的役割を果たす。学習者自身による自己組織化や自己計画化という強力な要素がある)、

③経験学習(教師によってコントロールされるものではなく、あらかじめ決定された目的がない。学習内容は、文脈や学習者の動機、出会うことになる他者、行われた発見などによって決められる。学習内容は、参加した活動の副産物である)、
の3つの方法が紹介されている。

(4)①もう1つの重要な概念が、「学習の守人」としての感情と動機である。

②『感情』は、学習の重要な『守人』である。

③感情と認知は、学習を導く頭脳の中で途切れなく働いている。

④能動的な感情はたとえば長期的な回想をもたらすし、消極的な感情は、脳内の学習過程を妨げ、時には学習が行われた後も生徒に学習の内容を全くあるいはほとんど思い出させないようにしてしまう」。

(5)①動機もまた学習の守人である。

②動機は、「意義ある知識やスキルの習得を生徒に保証する。感動のように、学習課題の取り組みに向かわせる積極的な動機の存在は、生徒を学習に熱心に取り組めるようにする。

③生徒が動機付けの仕組みに気づき、学習に動機がどう影響するかを知るよう助ければ、生徒はさらに優れた学習者になる」。

(6)この動機づけの基本的な方法には、次の8つがある。

①期待されることが自分にはできると感じている

②特定の行為をすれば成績の向上につながるという関係を知っている

③テーマが大切なものだと評価し、目的に明らかな意義を持つ

④学習活動に向かう能動的な感情を経験する

⑤消極的な感情を経験した時に学習から注意をそらせる

⑥自分の感情の強さや持続性、感情表現をコントロールできる時、学習の認知的資源を生徒は自由に扱える

⑦自分が持つ資源を管理でき、効果的に障害を乗り越えられる時に生徒たちは学習を続けられる

⑧生徒は、環境が学習に望ましいと知った時、動機規律方略を用い、学習に対して強く動機づけられる

(7)この8つの基礎的動機は、生涯にわたる学習を行う人々にとっても大きな参考となるだろう。

3. 学習環境形成のための7つの原理

(1)学習環境は、その中心的参加者として学習者を認め、学習者の活動的な関わりを促進し、学習者としての自分たちの活動の理解を学習者内に育てていく(学習者中心性)。

(2)学習環境は、学習の社会的本質の基礎となり、うまく組織化された共同学習を積極的に促進する(学習の社会性)。

(3)学習環境内にいる学習のプロフェッショナルは、学習者の動機づけや達成感情の重要な役割を高度に調和させる(感情の重要性)。

(4) 学習環境は、学習者間の個人的な差異、既有知識を含む差異に非常に敏感である(個人差の認識)。

(5) 学習環境は、ハードワークを要求するプログラムや過度な負担を取り除いて取り組めるプログラムなど、いろいろなプログラムを工夫する(すべての生徒の成長と学習の努力)。

(6) 学習環境は、明確な期待を伴って作用し、そうした期待と一貫したアセスメント戦略を展開する。そこでは、学習を支える形成的なフィードバックが特に強調される(形成的アセスメント)。

(7) 学習環境は、知識や教科の領域を超え、広い世界や地域にわたる「水平的なつながり」を強力に促進する(水平的なつながり)。

*ここで「水平的なつながり」とは、より大きな枠組みを発展させる力、多様な文脈にわたり知識を応用・活用し、初めての問題にも取り組める力であり、21世紀のコンピテンシーとして定義されているものの1つの要素とされている。

*上記の7つの原理のいずれが重要か。「本当に効果的と判断されるためには、学習環境の中に、すべての原理が提供されなければならない」。

P.210 ~ P.221

VII 学習環境の6つの要素

- (1) 「共同学習」
- (2) 「調べ学習」
- (3) 「形成的アセスメント」
- (4) 「サービス・ラーニング」
- (5) 「学校と家庭のパートナーシップ」
- (6) 「テクノロジーを活用した学習」

VIII イノベーティブな教育改革の7つの原理

1. 原理1 学習者中心性

- (1) 学習環境は、中心的参加者として学習者を認め、学習者の活動的な関わりを促進し、学習者としての自身の活動の理解をその内に育てること。
- (2) ここには、学習者の関与(学習者が関わりを持たなければ、学習の可能性は実質的に減少する)と自己調整のたくみさ(学習環境が、学習者としての生徒自身の活動の理解を生徒たちに発達させること)も含まれる。

2. 原理2 学習の社会性

学習環境は、学習の社会性の基礎となり、うまく組織化された共同学習を積極的に促進する。

3. 原理3 動機づけと感情への反応性

学習環境内にいる学習の専門家は、学習者の動機づけや達成感情の重要な役割を高度に調和させる。

4. **原理4 個人差への配慮**

学習環境は、学習者の個人的な差異、既有知識を含む差異に非常に敏感である。

5. **原理5 多様なプログラムと学習の努力**

学習環境は、ハードワークを要求するプログラムや過度な負担を取り除いて取り組めるプログラムなど、いろいろなプログラムを工夫する。

6. **原理6 学習のアセスメント**

学習環境は、明確な期待を伴って作用し、そうした期待と一貫したアセスメント戦略を展開する。そこでは、学習を支える形成的なフィードバックが特に強調される。

7. **原理7 水平的つながり**

学習環境は、知識や教科の領域を超え、広い世界や地域にわたる『水平的つながり』を強力に推進する。

*これらの原理は、学校だけではなく、今後の生涯学習の環境づくりにおいても重視していく必要があるだろう。

P.242

<コメント>

OECD が 3 年ごとに行っている 15 歳児の学習到達度調査 PISA の根底となる学力観、「キー・コンピテンシーズ」の日本への紹介者の第一人者で、日本の教育政策を牽引なさっておられる立田慶裕先生による本著は、「キー・コンピテンシーズ」の価値(大切さ)をわかりやすく紹介して下さるものとして極めて有益と考えます。本著を手掛かりに、日本の教育に「キーコンピテンシーズ」の考えが少しでも広まることを願っています。

2020年12月2日(水)